

【個人研究】

『プリセラピー』への訳注の試み（上）
— Prouty, G. の Pretherapy の研究（ ） —

岡 村 達 也*

Notes on Prouty's Theoretical Evolutions in
Person-centered / Experiential Therapy. Part I.
Studies of Pretherapy: I.

Tatsuya OKAMURA

ABSTRACT

The author has written much about Prouty's Pretherapy (Okamura, 1996, 1997, 1998, 2000a,b,c, 2001, In press a,b; Okamura & Hosaka, 2000). In September 2001 we published Japanese translation of Prouty's Theoretical Evolutions in Person-centered / Experiential Therapy published originally in 1994. In Japanese translation neither any editing nor any notes as well as any alteration of the text which will help Japanese readers read the book more easily were made. In this article the author tried some translator's notes on the first half of the book as part of the study of Prouty's Pretherapy.

Key Words: Prouty, Pretherapy, Notes

Prouty(1994)のプリセラピー(pretherapy)については、同じようなことをあちこちで書いたり訳したりしてきたので(岡村, 1996, 1997, 1998, 2000a, b, c, 2001, In press a, b; 岡村・保坂, 2000), ここでは述べない。

この度、その邦訳を出版したが、訳書は原著原型のままとすることとなり、書名を除いて、訳注も含めて一切の加除改変を避けた。

本稿では若干の訳注を試みる。内容的には、まず、初心者が本書を読むための基礎知識の補充や、場合によってはありがちな誤解の修正。次に、原著には欠けているテキストの引用の補充。第3に、以上と重なるが、とりわけ現象学をはじめとするプリセラピーの哲学的基礎にかかわるテキストの引用の補充。最後に、部分的には(訳語選択の趣旨も含めて)私見を加えた。

頁数は邦訳書の頁数である。

紙幅の関係で、全4部のうち第2部までであ

*おかむら たつや 文教大学人間科学部臨床心理学科

る。第3部以降は岡村(2002)に譲る。

刊行によせて(Foreword)

10頁 サン=マリティン=ラテン(Sint-Martins-Latem)
Sint-Martins 聖マルティヌス(316?-397),
フランスの守護聖人, トゥール司教(370?-
397), 祝日11月11日, に因んだ地名か。自分
の上着の半分を裁ち, 一方を寒さに凍える貧
者に与えたと伝えられる。仏語読み, サン=
マルタン。

10頁 文献

Cf. 笠原 嘉 1998 精神病(岩波新書
新赤版581) 岩波書店

11頁 Ciompi, L. (1991). Affect logic and
schizophrenia. In C. Eggers (ed.).
Schizophrenia and Youth: Etiology and
Therapeutic Consequences.
Berlin: Springer-Verlag, pp. 15-27.

Cf. 松本雅彦・井上有史・菅原圭悟(訳)
1994 感情論理 学樹書院

花村誠一・河本英夫(聞き手) 1998 分裂
病治療からカオス理論へ 河本英夫・チオン
ビL・花村誠一・ブランケンブルクW. 複雑
系の科学と現代思想—精神医学— 青土社
pp. 43-81.

はじめに(Preface)

14頁 「ひき裂かれた自己(a divided self)」
Laing, R. D. (1960). The Divided Self:
An Existential Study in Sanity and
Madness. London: Tavistock. 坂本健二・志
貴春彦・笠原 嘉(訳) 1971 ひき裂かれた
自己—分裂病と分裂病質の実存的研究— み
すず書房

14頁 自己の修復(a restoration of the
self)

Cf. Kohut, H. (1977). The Restoration
of the Self. New York: International
University Press. 本城秀次・笠原 嘉(監
訳) 1995 自己の修復 みすず書房

謝辞(Acknowledgments)

16頁 エルフィー・ヒンターコプフ(Elfie
Hinterkopf)

Cf. Hinterkopf, E. 1998 Integrating
Spirituality in Counseling: A Manual for
Using the Experiential Focusing Method.
American Counseling Association. 日笠摩
子・伊藤義美(訳) 2000 いのちとこころの
カウンセリング—体験的フォーカシング法—
金剛出版

序論(Introduction)

22頁 ジャーマイン・リーター(Germain Lietaer)

Cf. 中田行重(訳) 1988 クライエント中
心療法及び体験過程療法の今後への提言 人
間性心理学研究, 6, 91-93.

22頁 ウィスコンシン研究はパーソン中心の
歴史にとって非常に重要だ…。その研究を
もって, 理論的研究に大きな場所が与えら
れた時代が終わり, ロジャーズの理論的見
解の発展も終わった…。

Cf. 保坂 亨 1988 クライエント中心療
法の再検討 心理臨床学研究, 6(1), 42-51.
保坂 亨 1997 理論家ロジャーズ 久能
徹・末武康弘・保坂 亨・諸富祥彦 ロジャ
ーズを読む 岩崎学術出版社 pp. 85-114.

22頁 パーソン中心療法は知的発達障害のク
ライアントには適さないという, ロジャ
ーズの初期の頃の見解

「われわれの情報は貧困であるが, カウン
セリングは, ある年齢水準とある知的水準に
達している場合, いっそう適切に, しかもう
まく遂行されると考えるだけの理由がある。
その証拠はすでに引用しておいたが, それは,
面接によって処遇するケースを実際に臨床的
に選択しようとする場合, 生来的に正常な知
的能力を有するグループを選択する傾向のあ
ることを示している。境界線級ないしはそれ
以下の知能のものがサイコセラピーのために
選ばれることは, おそらくまれであろう。」
(Rogers, C. R. 1942 Counseling and
Psychotherapy: Newer Concepts in Practice.
Boston: Houghton Mifflin. 佐治守夫(編)

友田不二男(訳) 1966 ロージャーズ全集 2
カウンセリング 岩崎学術出版社 p.88)

第1章 カール・ロジャーズを読む (Carl Rogers: An Interpretation)

27頁 マルチン・ルター(Martin Luther)
1483-1546年。ドイツの宗教改革者。1517
年ローマ教皇による免罪符販売に反対した95
箇条提題によって宗教改革が始まる。破門さ
れたが、ザクセン選帝侯の保護を得、聖書の
独訳、現代ドイツ語の基礎を築く。信仰のみ
によって義とされる(信仰義認論) 教会で
はなく聖書のみが規範である(聖書原理) 信
仰者はすべて神の前に等しく祭司である
(万人司祭論)などに代表されるその神学思
想は、プロテスタント諸教会の原理として大
きな影響を及ぼしてきた。

27頁 セルフ・エンパワメント(self-empowerment)
エンパワメントは、権利や権限を与える
ことを意味する法律用語として17世紀に使
われ始めた。社会的に広く使われたしたのは、
第2次大戦後、アメリカの公民権運動やカウ
ンセリング、フェミニズム運動などの社会変
革活動を契機とする。現在では、元来の狭い
意味を越え、より広範な社会的プロセスを表
す概念として用いられる。共通するのは、社
会的に差別や搾取を受けたり、組織の中でみ
ずからコントロールする力を奪われた人々が、
そのコントロールを取り戻すプロセスを表そ
うとしていることである。(久保木 順・渡辺
文夫(編) 1998 現代のエスプリ376 エン
パワメント—人間尊重社会の新しいパラダ
イム— 至文堂 pp.5-6)

30頁 「生きるか死ぬか(to be or not to be)」
「生きるか、死ぬるか、そこが問題だ。暴
虐な運命の矢玉を心にじっと堪えるのと、海
と押しよせくるもろもろの困難に剣をとって
立ち向かい、抵抗してこれを終熄させるのと、
どちらが立派な態度か? 死ぬるは眠るに過
ぎない。もし眠りによって、この肉体が受け
ねばならぬ心の苦しみ、悩みのかずかずを絶

ち切れるものなら、それこそ専ら望ましい大
願成就だ。」(シェイクスピアW. 市川三喜・
松浦嘉一(訳) 1957 ハムレット 改版 岩波
書店 p.82.)

32頁 セラピストの目の中に目眼差しを向け
ると、そこに自分自身が表現されているの
が目に入った(looking into the thera-
pist's eyes and seeing herself
expressed) Winnicott(1971)によれば、
創造的に眼差しを向け(look)、世界を目に入
れる(see)には、自分が目に入れ(see)られた
体験が内在化されていなければならない。こ
の体験は生後数週の母-子関係で自然に起き
る。「個人の情緒発達において鏡の先駆は母
親の顔である。」(p.130)子どもが母親に眼差
しを向ける(look)とき目に入る(see)のは自
分自身であり、自己の感覚の確立は母親の顔
の中に眼差しを向けた(look)ときそこにある
(=目に入る(see))反応にかかっている。

こうした相互作用を心理療法の場に置き換
えると次のようになる:「赤ん坊や子どもが、
母親の顔の中で、のちには鏡の中で、自己を
目に入れる(see)というところから、分析や
心理療法作業に眼差しを向けて(look)みよう。
すると、心理療法は才気走ったピッタリの解
釈をすることではない; およそ心理療法は患
者がもち込むものを長期にわたって患者に与
え返していくことであるということになる。
心理療法はそこで目に入る(see)はずのものを
反射する顔の、複雑な派生物なのである。...
もしこのことを私が不足なく行えば、患者は
自分自身の自己を発見するだろうと考えたい。」
(pp.137-138)

この鏡になるという作業は、言うは易く行
うは難い:「私は、患者がもち込むものを反
射するというこの作業が容易なものであると
私が考えているような印象を与えたくない。
それは容易でないし、情緒的に消耗する。し
かし、報われる。患者はたとえ治癒していな
いときでさえ、ありのままの自分が目に入れ
てもらえる(see)ことに感謝する。」(p.138)
(岡村達也 1999 遊ぶことと心理療法—ア

クスライン、ベイトソン、ウィニコット—
人間科学研究, 21, 25-34.)

Winnicott, D. W. 1971 *Playing and reality*. Penguin Books. 橋本正雄(訳) 1979

遊ぶことと現実 岩崎学術出版社

32頁 痛みをともにすること(compassion)

「中村草田男の俳句に『直面一瞬 ゆるし
給われ 冬日の顔々』というのがある。これは
瀬戸内海にあるハンセン病の療養所のある
島を訪れた時の句である。...こちらはそれ
に対して何の責任はなくても、運の貧しさに逢
い、モイラ[運命の女神]に打たれた人々
に対する共苦から、やはり内面的にこの言葉は
ほとばしり出るのである。そしてこれこそ
その後、労多くても真剣な治療を支えるもの
ではないだろうか。」(霜山徳爾 1989 素足の
心理療法 みすず書房 144頁) この「共苦」
がcompassionである。

32頁 知的発達障害と分裂病という二重の診
断を受けていたクライアント

104頁「前象徴的体験過程」のクライア
ントのこと。

34頁 賞賛すること(prizing)

prizeという単語は私たちにはノーベル賞
(Nobel Prize)でおなじみである。英和辞典
を引くと、動詞としては、「高く評価する、
重んじる」などが載っている。語源を見ると
praiseと同根らしい。で、praiseを引いてみ
る。すると、「神をことば・歌などで賛美す
る」というのが目に飛び込んでくる。語学的
に正しいかどうか、神をpraiseするに対し
て、ひとをprizeするではないのかと思えて
ならない。(岡村達也 1999 カウンセリン
グの条件—純粋性・受容・共感をめぐって—
垣内出版 p.126.)

34頁 個人は自分を中心とする体験の世界に
存在している...。...ひとは自分がその場を
どう体験しているかにしたがって反応する...。
この知覚された場こそがクライアントにとつ
ての現実である。

Rogers, C. R. 1951 *Client-centered*

*therapy: its current practice, implica-
tions, and theory*. Houghton Mifflin.
p.483, 484. 伊東博(編訳) 1967 ロー
ジャーズ全集8 パースナリティ理論 岩
崎学術出版社 p.92, 94.

36頁 感情移入(中に入って感じるこ
と)するのは、精神病的現象をより十分に把握
するためである。

Cf. 120頁「前象徴的体験過程」のク
ライアント。

36頁 純粋性もセラピストが関係の中
で生かすべき態度の1つである。ロジャ
ーズ(Rogers 1957)はこれを、セラ
ピーにおいて一致しており、統合されて
いることと述べている[p.96]。ロ
ジャーズにとって純粋性とは、セラ
ピストが自由にかつ奥底から自分
自身であることである[p.97]。つまり、
自分の実際の体験が自分であり、その
自分が正確に自分の気づき(awareness)
に現れていることである。

ここに記されている事柄は「一致」「純
粋」「統合」のほか、「真実」「透明」
など、いろいろなことばで記されてい
る。それぞれの語感がそれぞれの文脈
での使い分けをさせているように感じ
られる。例えば、「一致」と言うと、例
のヴェン図が思い浮かべられて、<体
験>と<自己概念>の積集合が増えてい
くイメージがわいてきて、脱・価値化
された科学的概念の感じがする。「純
粋」と言うと、積集合の増加というよ
りも、差集合が減っていく(空集合に
なる)イメージがわいてくる。つまり、
<否認>や<歪曲>、つまり、不純物の
減少というイメージである。「一致」
同様、イメージは脱・価値化された科
学的概念なのだが、その語感は、書
画骨董の類の真價の「真」でつかま
えるのがいいように思う。「統合」、
これは臨床家が同意できる言い方だ
ろうか。しかし、上の定義で理解しな
ければならない。また、「真実」は以
上のような状態を内側から実感した
自分のもつ感覚、「透明」は以上よう
な状態を外側から見た他者のもつ感
覚、というような感じがする。いず

れにせよ、みな同じ事態を指していることはハッキリ理解しておきたいと思う。さもないと、語感に引きずられて、あらぬ理解に及ぶことがあるように思うからである。「真実のひと」という表現に道徳的な意味などはないし、「透明なひと」が透明人間であるはずもない。当たり前か！(岡村達也 1999 カウンセリングの条件—純粋性・受容・共感をめぐって— 垣内出版 pp.93-94.)

Cf. 41頁「註3」

38頁 自分の気持ちを行動で示すのが適切なときもある。…助けになりたいという態度を行動で示す。お金を与えたり貸したりすることもある。もちろんクライアントが生き延びるのに役立つならば、あるいは、実生活をするのに役立つならばの話である。元保護観察官の羽間京子氏(千葉大学大学院教育学研究科助教授)は、保護観察下にある少年に対し、このことを巧みに行っていた。

また、これに関連して、Freud, S. が技法論で書いていることと実際にやっていたこととの間にかなりいろいろな食い違いがあることが夙に知られており、食事をさせてから自由連想を始めたという記録が残っている。これに関連して小此木は言う。「絶対に食事をさせないことが、治療構造や治療関係をちゃんと守っていることを意味するのかどうか…心の中にきちんと治療構造ができ上がっていて、お互いの間の距離が保てている治療者ならば、それもある意味ではあり得るかもしれない。いくら食事をさせなくても時間をきちっと守っていても、心の中ではすぐに患者と融合してしまうような治療者だったら、治療構造をいくら厳密に守ったからといって、それは意味がない。」ただし、食べさせてもらったことが患者に大変な不安を引き起こしたことを指摘し、Freud の認識上の盲点を指摘している(小此木啓吾・岩崎徹也・橋本雅雄・皆川邦直(編) 1983 精神分析セミナー フロイトの治療技法論 岩崎学術出版社 p.202)。「対人的親密さがしばしば極度の不安を引き起こす」一例である。

39頁 反射の技法を最初に開発したのはオート・ランクである(Rychlak, 1971)。ランクはこれを認知的な技法として用いていた。…ロジャーズ(Rogers, 1975)はランクの影響を深く受けながら、創造的に拡大し、気持ちの反射を含めた。

「しばらくしてランク派の指導を受けたソーシャルワーカーから、一番有効なのはクライアントの言葉を通して認められる感情や情緒に耳を傾けることだと学びました。一番よい応答はその感情をクライアントに反射してやることだと教えてくれたのは彼女だと思います。『反射』という言葉は、後に私を萎縮させることになりました。けれども当時は、セラピストである私を成長させてくれたので、大変感謝していました。」(畠瀬直子(監訳) 1984 人間尊重の心理学—わが人生と思想を語る— 創元社 p.129.)

41頁 C. R. Rogers(1951). *Client-Centered Therapy: Its Current Practice, Implications, and Theory*. Boston:Houghton Mifflin, p.29.) 「筆者にとって、まさしく非指示的な態度を表現している非指示的カウンセラーの応答についての[いまひとつの]レベルがある。ある意味では、それは、カウンセラーによって実際に実践される目標というよりも、むしろあるひとつの目標である。しかし、何人かの経験によれば、それは、かなり達成できる目標であり、その目標は…あるひとつの基本的なやり方でカウンセリングの過程の特質を変えるのである。このレベルにおいて、カウンセラーの参加は、クライアントが表現を与える感情についてクライアントとともに積極的に経験することになり、カウンセラーは、最大限の努力をはらって話し合っている相手の皮膚の下に入り込もうとし、内部に入り込んで、表明されている態度を観察するのではなくて表明された態度を生きようと努める、つまり、それらの態度の変化してゆく特質のあらゆるニュアンスをとらえようと努めるのである。一言でいえば、自分自身を完全に他人の態度の中に吸収させようと

努めるのである。しかも、このようにしようとする苦闘には、いかなる他のタイプのカウンセラーの活動もしくは態度も容れる余地がないのである。すなわち、もしも彼が他人の態度を生きようとしているならば、彼は、それらの態度を診断していることはできないし、その過程をもっと早く進ませることを考えていることはできないのである。なぜならば、彼は別のひとりの人間であって、そのクライアントではなく、理解することは自然になされるのではなくて習得されなければならない、しかもこのことは、いかなる他のタイプの注意をも排除して、相手の感情に対し、最も強力な、継続的な、そして積極的な注意をはらうように習得されなければならないからである。」(友田不二男(編訳) 1966 ロージャズ全集3 サイコセラピー 岩崎学術出版社 p.38)

第3章 ロジャーズとジェンドリン の比較と限界

(Rogers / Gendlin: Comparison
and Limitations)

55頁 セラピーについてロジャーズは、心理療法の過程方程式のセラピスト側を強調している。

Rogers, C. R. 1961 The process equation of psychotherapy. American Journal of Psychotherapy, 15, 27-45. 伊東 博(訳) 1966 サイコセラピーの過程方程式 伊東博(編訳) ロージャズ全集4 サイコセラピーの過程 岩崎学術出版社 pp.247-279.

57頁 幻覚は「構造拘束的(structure bound)」である...(Gendlin, 1964)。

村瀬孝雄・池見 陽(訳) 1999 人格変化の一理論 池見 陽・村瀬孝雄(訳) セラピープロセスの小さな一歩—フォーカシングからの人間理解— 金剛出版 pp.219-224.

第4章 プリセラピーの哲学

(Pre-Therapy: An Philosophical
Psychology)

61頁 「範疇的態度(categorical attitude)」

健忘失語における呼称障害を説明するためにGoldstein,K.が導入した概念。のち適用範囲を脳損傷患者に見られる他の多くの行動障害に拡大。のち「抽象的態度」という語を用いるが意味は同じ。ある事物に名前をつけるとき、例えば、ある与えられた色彩に名前をつけるとき、普通は容易にその名前を呼び出すことができる。これは、その与えられた特定の刺激のもっている個別的な特徴、例えば、明度や彩度や色相などの微細な差異にかかわらず、その刺激が所属するより一般的な色の範疇に対して名前を与えることができるからである。特定のものを、ある範疇の代表として捉える態度があってはじめて、呼称という行為が可能になる。これが「範疇的態度」。これに対して、与えられた事物の個別的具体的な特徴に縛られて、その事物を、それが属するある範疇の代表と捉えることができない、したがって、そもそも範疇を代表するという機能をもつ名前を呼び出すことができなくなるのが「具体的態度」。(山鳥 重 1993 範疇的態度 加藤正明(編集代表) 新版精神医学事典 弘文堂 p.657.)

Cf. ゴールドシュタイン K. 村上 仁・黒丸正四郎(訳) 1970 生体の機能—心理学と生理学の間— 改版 みすず書房

ゴールドシュタイン K. 西谷三四郎(訳) 1972 人間—その精神病理学的考察— 新版誠信書房

62頁 体験に対する自然な態度の判断停止、すなわち、本質への現象学的還元(the suspension of the natural attitude toward experience, or phenomenological reduction to an essence)

Husserl 現象学において、「自然的態度」から「現象学的態度」へと態度変更するための操作を「現象学的エポケー(判断停止)」と言い、この限りでは「現象学的還元」と同義である。Husserlによれば、自然的態度に

おける一般定立(普遍的な「存在信憑」)のスイッチを切り、対象に関する存在指定を遮断し、その存在性格を「括弧に入れる」ことによって、純粹意識の領域、もしくは、正確に言えば、世界と世界意識との普遍的相関関係という新たな探究領域が開ける。自然的動機のままに自己を忘却する代わりに、世界の存在と意味を捉え直そうという意志がエボケーの根源に潜む。通常覆い隠されている世界と意識との関係に、接近可能なものにする。(貫 成人 1998 エボケー 廣松 渉他 編) 岩波哲学・思想辞典 岩波書店 p.162.)

62頁 現象は、「みずからをあるがままに開き示すがゆえに、絶対的に、それそのものである。現象は、絶対的に自己直示的であるがゆえに、あるがままに記述可能なのである。(what it is, absolutely, for it reveals itself as it is. The phenomenon can be described, as such, for it is absolutely indicative of itself.)」

「現象は、絶対的に、それがあるところのものである。なぜなら、現象は、それがあるところに、自らをあらわにするからである。現象は、現象としてのかぎりにおいて、研究され記述されうる。なぜなら、それは、絶対的な意味で、それ自身を指示するものだからである。」(松波信三郎 訳) 1956 存在と無—現象学的存在論の試み— 人文書院 p.13.)

62頁 あるものが<自己所与的>である、とは、どんな種類の象徴であるにせよ、象徴を通じてしか所与とならないのではない、ということである。別言すれば、あらかじめなんらかの仕方で定義されている記号の意味するものとしてのみ所与となるのではない、ということである。この意味において、現象学的哲学は世界を脱象徴化し続けるものである。

「もはやたんにある種の象徴によって、すなわちあらかじめある仕方で定義されている徴表の単なる『充実』として『思念』されているような仕方では、与えられていないもののみが、自己所与的でありうる。この意味に

おいて、現象学的哲学は間断のない世界の非象徴化である。」(小林靖晶 訳) 1978 現象学と認識論 シェーラー著作集15 白水社 p.300.)

63頁 メルロ＝ポンティの**ことば**を借りれば、世界・自己・他者は「経験に先立つ具体(C ocrete A-Priori)」である(Merleau-Ponty, 1962; Mallin, 1979) 世界・自己・他者は、いま-ここの意識にとって、「隠されたものを浮かび上がらせる絶対(revelatory absoute)」である。それは自然で、定言的な[あるがままに、なんらの仮定条件をつけずに端的に浮かび上がらせる]ものであり、そうした世界・自己・他者を通じて、1つ1つ具体的な実存するものがみずからを顕わしてくる。

「われわれはもはや、知覚とは**端緒**における科学だとは言わないで、逆に、**古典的科学とは己れの起源を忘れてみずから完結したもの**と思い込んでいる**知覚のこと**だと言う。したがって、**最初の哲学的行為は、客観的世界の手前**にある生きられた世界にまでたち戻る**ことだ**、ということになるだろう。**それ**という**のも、この生きられた世界においてこそ、われわれは客観的世界の権利もその諸限界も、了解することができるであろうからだ。また、最初の哲学的行為は、事物にはその具体的表情を、有機体には世界に対処するその固有の仕方を、主観性にはその歴史的内属性を返すことだ**、ということになるだろう。」(竹内芳郎・小木貞孝 訳) 1967 知覚の現象学1 みすず書房 p.110.: 傍点引用者)

64頁 フッサール(Spiegelberg, 1978)は、意識(consciousness)はつねに「志向的(intentional)」であると概念化した。すなわち、意識はつねに何か「についての(of)」意識である。意識はつねに「対象(object)」を「志向する(intend)」。

「あらゆる世界内部の存在に関して判断停止をしたとしても、世界内部のものに関わる多様な思うことが、それ自身のうちにこの関わりを含んでいるということ、例えば、この

机の知覚は、判断停止の後も、その前と同様に、まさにその机の知覚であるということ、このことに何ら変わりはない、という点である。こうして、およそいかなる意識体験も、それ自身で何ものかについての意識である。この対象なるものの正当な現実性の効力がどのような状態であれ、また、超越論的な態度をとっている者としての私が、自然な態度でもっていた効力のあれこれを差し控えているとしても、その点では変わりない。それゆえ、我思うという超越論的な言い方には、もう一つの項が追加されねばならない。すべての思うこと、すべての意識体験は何らかのものを思念しており、この思念という仕方でそれ自身のうちにそのつどの思われたものを伴っており、すべての意識体験がそれぞれの仕方でそうだとも言える。例えば、家の知覚は家を、正確には、この個別の家としての家を思念しており、それを知覚と言う仕方で思念している。家の想起は想起という仕方で、家の想像は想像という仕方で、それぞれ同じ家を思念している。また、知覚において「そこにある」その家についての述定的な判断は、その家をまさに判断というしかたで思念しているし、それに加わる価値づけはまた新しい仕方において、等々と、それぞれ思念している。意識体験を私たちが志向とも呼ぶ時、この志向性という言葉は、何かについての意識であること、すなわち思うこととしてその思われたものを自らのうちに伴っていること、ほかならぬまさにこのことを意味している。」(浜渦辰二(訳) 2001 デカルト的省察 岩波文庫 pp.68-69. : 傍点引用者)

スピーゲルバーク H. 立松弘孝(監訳) 2000 現象学的運動(上) 世界書院 pp.190-195.
64頁 「意味の創造(creation of meaning)」
Gendlin, E. T. 1962 Experiencing and the creation of meaning. New York: Free Press. 筒井健雄(訳) 1993 体験過程と意味の創造 ぶっく東京

第5章 プリセラピーの理論

(Pre-Therapy as a Theoretical System)

66頁 分裂病のクライアントや発達障害を伴う精神病のクライアントの多くは、容易には治療関係に入れない。と同時に、容易にはみずからの体験過程にふれられない。おそらくこれは、強力な自閉の結果、「内界との接触(internal contact)」が欠けてしまうためだろう(Minkowski, 1970; ...)

「現実との生ける接触は環境との関係に於ける生きた人格の根底そのものと関連する。...環境は吾々を圍繞するところの大いなる流動であり、それなくしては吾々が生きることの出来ないミリューである。この流動の中から事件が『小島』のように浮び出て、人格の最深奥の琴線を揺り動かす。逆に人格は之を摂取し、緊張した弦の如く之と共に振動し、之を自己の内に浸透せしめる。そして自己の内奥の生の一部分をば環境に附加することによつて、人格は人格的に反応する。...行為と感情を以て、笑いと涙を以て反応する。そしてこの行為や感情は生成する環境の流動に参加し、一滴の水の如くその流動の中に自らを失い、捉えることの出来ない無限の中に消えて行く。このようにして吾々と現実との間に驚くべき調和が生まれる。これによつて、吾々は自分自身の生という観念を失うことなしに、世界の歩みに参与することが出来る。上に述べたことから、現実との生ける接触は生の内奥の動力学に関連することがわかる。」(ミンコフスキーE. 村上 仁(訳) 1954 精神分裂病—分裂性性格者及び精神分裂病者の精神病理学— みすず書房 p.74. : 傍点引用者)

69頁 ブーバーの、「我 I」の「汝(Thou)」に対する「応答(Response)」

ブーバー M. 植田重雄(訳) 1979 我と汝・対話 岩波書店

69頁 反響動作・緊張病状態・変奇な姿勢(echopraxia, catatonia, and bizarre body posturing)

緊張病 (catatonia) は緊張病症候群が臨床症状の中心をなす分裂病の亜形。緊張病症候群の症状の1つにカタレプシーがある。一定の姿勢や四肢の位置を取ると、それを変えようとせず、長時間そのままの姿でいる。昏迷あるいは亜昏迷状態において能動性を失い、自発的行動ができない状態であり、疲労も感じない。高度になると、筋緊張が高まり、外部から、四肢を思いのままの形に、あたかも蠅細工のように曲げ、不自然な姿勢を取らせることができ、蠅屈症と言う。(大森健一 1993 カタレプシー 加藤正明(編集代表) 新版精神医学事典 弘文堂 p.111.)

77頁 κ係数

あり・なし、あるいは、順序尺度として測定される場合に用いられる一致度。単なる一致度は、判断がどちらかに偏っている場合、必ずしも一致性を反映しないため、それを補正する方法。観察された一致率から期待される一致率を引き、その値を、1から期待一致率を引いた値で除したもの。期待一致率とは、周辺分布から期待される一致数の割合。観察一致率が期待一致率に等しいとき0、観察一致率が1のとき最大値1、観察一致率が期待一致率より小さいときマイナスの値になる。(三宅由子 1993 信頼性 加藤正明(編集代表) 新版精神医学事典 弘文堂 p.414.)

78頁 パールズは、人間存在とその環境との機能的関係を接触境界(contact boundary)という観点から記述している。接触境界において心理的出来事が生じる。パールズはさらに、思考・行為・情動とは接触境界で生じた心理的出来事に対する体験の仕方のことであり、それらとの出会い方のことであり、と述べている。

「人間は一人では生きることができない。環境という場があって初めて存在することができるのである。すなわち、人間は何がしかの場に属することなしには一瞬たりとも生きることができない。人間の行動は、人間と人間を取り巻いている環境を含む、全体的な場の関数関係にあると言える。すなわち人間の

行動は、環境との関係がどのようなものかによって決定される。…人間が自分の置かれた環境のなかでどのように機能するかを研究することは、人間と環境とがコンタクトを持つ、その接点において、何が起きているかを研究することと同じである。心理的な事象が起こるのは、まさに、このコンタクトの接点においてである。人間の思考や行為、行動、感情は、これら環境との接点での経験がどのようなものであるかによって違ってくる。」(倉戸ヨシヤ(監訳) 日高正宏・井上文彦・倉戸由紀子(訳) 1990 ゲシュタルト療法—その理論と実際— ナカニシヤ出版 pp.29-30.)

78頁 Polster, E., and M. Polster. (1974). *Gestalt Therapy Integrated*. New York: Vintage Books.

Cf. ポルスターM. 倉戸ヨシヤ(訳) 1990 ゲシュタルト療法—その誕生の過程と臨床への応用— ゼイクJ. K. (編) 成瀬悟策(監訳) 21世紀の心理療法 誠信書房 pp.552-577.

ポルスターE. 福井康之(訳) 1990 現在からの逃走—移行と構造— ゼイクJ. K. (編) 成瀬悟策(監訳) 21世紀の心理療法 誠信書房 pp.578-605.

ポルスターE. 深澤道子・西本知子(訳) 1998 あなたの人生も物語になる—ゲシュタルト療法における魅せられること— 日本評論社

第6章 プリセラピーの実践 (The Practice of Pre-Therapy)

80頁 共感のもう1つの水準は、時間性(temporality)と空間性(spatiality)に関するものである(Binswanger, 1958)

宮本忠雄(訳) 1967 精神医学における現存在分析的研究方向 荻野恒一・木村 敏・宮本忠雄(訳) 現象学的人間学—講演と論文1— みすず書房 pp.263-264.

80頁 時間や空間の体験が変容することがよくある。

Cf. 宮本忠雄 1965 精神病理学における

時間と空間 宮本忠雄 1982 妄想研究とその周辺 弘文堂 pp.92-135.

81頁 電気ショック療法

頭部に通電して痙攣を起こさせる治療法。抗精神病薬開発前には、分裂病や気分障害の治療に広く用いられた。特に、興奮、昏迷、妄想・幻覚、抑うつ症状などにきわめて有効。安全な治療法だが、全身痙攣が残酷な印象を与え、突然意識を失う不快感や頭痛などを起こすため、あまり用いられなくなった。しかし、苦痛を与えず、痙攣を起こさせない方法もあり、大量の薬物を長期間使うより、必要に応じてこの治療法を用いる方がよいことがある(e.g. 加藤忠文 1999 双極性障害—躁うつ病の分子病理学と治療戦略—医学書院)。「電撃療法」や「電気痙攣療法」という用語は不要な誤解を与えるので、「通電療法」などと呼んでもよい。(山下 格 2000 精神医学ハンドブック—医学・保健・福祉の基礎知識—第3版 日本評論社 p.117.)

82頁 Stelazine (一般名・商品名ともトリフロペラジン, 抗精神病薬), Diazepam (一般名ジアゼパム, 商品名セルシン, 抗不安薬), Imipramine (一般名イミプラミン, 商品名トフラニール, 抗うつ薬), Chlorpromazine (一般名クロルプロマジン, 商品名ウインタミン, 抗精神病薬), Anafranil (一般名クロミプラミン, 商品名アナフラニール, 抗うつ薬), Phenothiazine (フェノチアジン系抗精神病薬の総称。一般名トリフロペラジン, クロルプロマジンを含む), Haldol (一般名ハロペリドール, 商品名セレネース, 抗精神病薬), Trifluoperazine (一般名・商品名ともトリフロペラジン, 抗精神病薬) などなど。

Cf. 井上令一・四宮滋子(監訳) 1996 カプラン臨床精神医学テキスト—DSM- 診断基準の臨床への展開— 医学書院エムワイダブリュー pp.565-567.

なお、わが国ではクロミプラミン(商品名アナフラニール)が抗うつ薬として市販され

て以来、その強迫効果が注目され、保健適用はないものの臨床現場では比較的良好に使われてきた。米国ではFDA(食品医薬品庁)がクロミプラミンを強迫性障害の治療薬として認可したのは10年前の1989年(米国ではクロミプラミンは抗うつ薬としては認可されていない)(樋口輝彦 1999 強迫性障害の薬物療法 久保木富房・不安抑うつ臨床研究会(編))

強迫性障害—わかっちゃいるけどやめられない症候群— 日本評論社 pp.30-43.)

96頁 ナタリー・ロジャーズ(Natalie Rogers)

Cf. 柘植明子(監修)秋山恵子・坂田裕子・島村奈都海・三谷裕美(訳) 啓かれゆく女性—中年期における変革の10年— 創元社

小野京子・坂田裕子(訳) 2000 表現アートセラピー—創造性に関われるプロセス— 誠信書房

96頁 ナサニエル・ラスキン(Nathaniel Raskin)

Cf. 伊東 博(訳) 1967 非指示的セラピーの発達 伊東 博(編訳) ロージャズ全集17 クライアント中心療法の評価 岩崎学術出版社 pp.3-44.

伊東 博(訳) 1967 クライアント中心療法における研究の展望 伊東 博(編訳) ロージャズ全集17 クライアント中心療法の評価 岩崎学術出版社 pp.169-228.

<付記>本研究には平成13年度文教大学個人研究費:研究課題「ProutyのPretherapyの研究」を使用した。

文献

岡村達也(1996): パーソンセンタード・カウンセリングにおける「治療的人格変化の必要十分条件」論の展開—カウンセリングの第1条件としての「プリセラピー」と、カウンセラーの第4条件としての「いま-ここに-いること」をめぐる— 専修人文論集(専修大学), 26, 183-200.

岡村達也(1997): プリセラピー—パーソンセンタード・カウンセリングの第1条件(心理的接触をめぐる)— 村瀬孝雄(編) こころの科学74 ロジャーズ—クライアント中心療法の現在—

日本評論社 pp.28-33.

岡村達也(1998): 分裂病青年の事例—Mr. Vac—
田畑 治(編) 現代のエスプリ374 クライエ
ント中心療法 至文堂 pp.148-157.

岡村達也(訳)(2000a): プリセラピーの理論 メア
ンズ, D. 諸富祥彦(監訳) パーソンセンタ
ード・カウンセリングの実際—ロジャーズのア
プローチの新たな展開— コスモス・ライブラリー
pp.203-209.

岡村達也(訳)(2000b): プリセラピーの実際 メア
ンズD. 諸富祥彦(監訳) パーソンセンタ
ード・カウンセリングの実際—ロジャーズのア
プローチの新たな展開— コスモス・ライブラリー
pp.210-215.

岡村達也(2000c): 「理解すること」から「いま-
ここに-いること」としての「反射」ヘークライ
アント中心/パーソン中心カウンセリングにお
ける「治療的人格変化の必要十分条件」論の展
開— 日本カウンセリング研究会本部

岡村達也(2001): 「理解すること」から「いま-こ
こに-いること」としての「反射」ヘークライ
アント中心/パーソン中心カウンセリングにお
ける「治療的人格変化の必要十分条件」論の展開—
カウンセリング(全日本カウンセリング協議会),
34(1), 13-21.

岡村達也(2002): 『プリセラピー』への訳注の読
み(下) - Prouty, G. の Pretherapy の研究() -
臨床相談研究所紀要(文教大学), 6(印刷中)

岡村達也(In press a): 「理解すること」から
「いま-ここに-いること」としての「反射」ヘー
ククライアント中心/パーソン中心カウンセリ
ングにおける「治療的人格変化の必要十分条件」
論の展開—(続) カウンセリング(全日本カウ
セリング協議会), 34(2).

Okamura, T. (In Press b): Pretherapy: Concerning the
First Condition (Psychological Contact) for
Person-centered Counseling. International Pre-
Therapy Review, 1.

岡村達也・保坂 亨 2000 パーソンセンタード・
カウンセリングにおける「治療的人格変化の必
要十分条件」の技法論的展開—第1条件の見直
しからプリ-セラピー, 反射の復権へ— 心理臨
床学研究, 18, 299-304.

Prouty, G. (1994): Theoretical Evolutions in
Person-Centered / Experiential Therapy
: Applications to Schizophrenic and Retarded
Psychoses. Westport, Connecticut: Praeger
Publishers. 岡村達也・日笠摩子(訳) 2001

プリセラピー—パーソン中心/体験過程療法か
ら分裂病と発達障害への挑戦— 日本評論社